

個人と組織。相手の立場で俯瞰する

～苦戦して得た場数を活かしきる～

弁護士・経営学修士(MBA)
まつおか たいちろう
松岡 太郎 氏
(文京支部)

高田馬場総合法律事務所
新宿区高田馬場1-28-10 三慶ビル4F
TEL : 03-6302-1505
Eメール : t.matsuoka@asayake-law.com
趣味 : 映画鑑賞



「僕、取り柄がないんですよ。我慢して、我慢して。ポコッと少しづつ上がるタイプなんです」と松岡太郎氏(弁護士)。少年のような、はにかんだ表情の笑顔に。

松岡氏が法曹界を目指すきっかけとなったのは高校二年生の夏。社会正義をなすなら、検事になれ!!という古文の先生の発言だった。「なぜか先生の言葉が心に響きました。授業の内容は覚えていません」と笑う。法学部へと進み、弁護士になるべく粘り強く挑戦。合格は三三歳のとき。一つの法律事務所を経営して、現在は独立して太田茂氏(板橋支部長)と事務所を共にする。「彼は苦しい司法修習時代を共にくぐり抜けた盟友です」と微笑む。

法律家となるにあつては学問のみが由来ではない。「空手に出会ってなければ弁護士になつていないですね」と松岡氏。二十歳の時、空手道場の門を叩く。「自分もついていた安いプライドが叩き潰されました。しごとかではないのです。どのような相手でも、個人として向かい合い、胸を貸してくれる先生・先輩方の姿勢に直面しました。諦めないこと、大切さも学びました」と回顧。

初めて勤めた法律事務所。ボス弁護士からの紹介は稀。大半はネット広告で見知らぬ相談者を相手に受任から解決まで導く役を最初から一人で担った。「半年間はきつかったです。

まず一対一の関係に持ち込むことが課題」とまさに徒手空拳の日々。「我々町の弁護士はどうしても感情的な衝突のある案件を扱うことが多く、人の心と向き合うことが重要。感情は論理を超えます。紛争の解決は杓子定規にはいかなないと分かりました。いがみ合うより、お互いうまくいかなかな。何かないかな、と今でも想いを巡らせます」。

「紛争解決に苦しみ抜いていたとき、隣の席のボスは助けてくれなかつたと思つていました」と松岡氏。「しかし、移籍先の事務所では、後輩を育てていたときに、ふと前職のボスと同じ言葉を発している自分に気が付いたので。人間、そんなもんじゃないだろう。もう少し相談者を深掘りしなきゃ」など：その瞬間、ボスなりに僕を育ててくれたのだなと感謝の念で満たされました」。

松岡氏は今年三月MBA(経営学修士)も取得。いがみあう労使関係を何とかできないかの答え探し、己を上げるための選択でもあった。「在学中は人の心に向き合う学問、組織論がとくに愉しかったです。そして、いま一番愉しいのは同友会ですね。理論と実地がつながるのを日々実感しています」と笑顔。

氏のエピソードには息づかいがあり安心感を覚える。自然体の人である。

(広報部 原田健也 鈴木啓文)